場所　〒502-0812 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ

千秋（せんしゅう）まちかど文庫 通信

第184号
2023年11月

運営委員会発行（記録:安藤彰浩、編集:中川健史）（主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第184回哲学カフェ例会（2023.10.12）

《ファクトとフェイク、あなたはどう見分けますか？》

「この問題はちょっとやっかいですね。でもポイントは、発信する情報源、その発信内容の損得に注目することでしょうね。特に、政府やメディアから流される情報に注意しなければ・・。」

＜はじめに＞　主宰者：吉田千秋

＜はじめに＞　吉田千秋

今日は、「ファクトとフェイク、あなたはどう見分けますか？」というテーマで例会を行います。

洋の東西を問わず昔から、とくに国家権力側から様々な偽情報が流されてきました。だが、昔は情報手段が少なかったが、今はたいへん多様になり、その分、正しい情報（ファクト）なのか、偽の情報（フェイク）なのかの見分けが付けにくくなっています。

そこで今回は、フクシマの原発「汚染水」の海洋投棄問題と、ウクライナ戦争の報道の二つを取り上げて、大橋さんから問題提起して頂きます。

ボクは11月3日行われる「ぎふ平和のつどい」の準備に追われていますので、今日は司会をさせて頂きます。

＜問題提起＞　大橋　健司

・フクシマ汚染水の海洋放出問題では、言うまでもなくその最重要点は、「処理水」に関する安全性だ。政府と東電の説明は、①多種類の放射性物質を含んだ汚染水は、ALPUS（核種除去装置）を通してトリチュウム以外の放射性物質を基準値以下まで取り除く、②残留するトリチュウムは排出基準値＝15,00ベクレル/ℓをその1/100にまで海水で薄め、③排出前チェックと排出後は海域をモリタリングし、観測値を公開することで安全性を確認。政府がその工程管理に全責任を持つ、という内容だった。また、その科学的安全性については、IAEA（国際原子力機構）の検査を受け、そのお墨付きを得たとされた。

・一方、FoE（Friendship of Earth Japan）や原子力市民委員会などの民間団体は、日本のトリチュウムの排出基準はEUやカナダなどより低く、近年排出そのものを禁止する事例もあると批判。さらに、トリチュウムの線量は微弱ながらも体内に取り込まれれば染色体を壊す力があり、原発周辺で白血病などを発症した事例があると警鐘を鳴らす。

吉田さんと大橋さん

・また、汚染処理水放出を受けて、中国がそれを強く批判し、日本産の海産物の輸入全面停止の処置を取ったが、日本政府は「中国は科学的に安全が証明されたことを否定し、突出した行動をとっている」と反論した。それに関わって、政界や経済界などの一部からも「中国の見解は非科学的で、風評被害を誘発」と反発も起きた。一方、現地福島を始め安全性等に不安を持つ国民も少なくない中で、これで率直に疑問を発し論議しあう民主的な応答関係が成り立ちにくい空気が広がった、との見方もある。

・汚染水問題では、ファクトチェックは難しい。科学上の判断・評価ともからんでおり、意図的なデーターな

どの捻じ曲げなどがない限り、フェイクとは断定できないが、十分な国民的論議が必要だ。
・ウクライナ戦争については、ロシアは昨年2月末の全面侵攻を正当化する声明を出しており、そこからチェックしていきたい。
　先ず、第一は、NATO(北大西洋条約機構)との問題である。NATOは08年の首脳会議でウクライナとジョージアの将来的加盟を決め、14年以降ウクライナの政権は加盟に向けた活動を加速している。これは冷戦を終結させる際の米ソ間の合意や欧州安全協力機構(OSCE)での宣言に反する。事態は「キューバ危機」における米の立場と同じ状況にロシアが陥り、安全保障への重大な脅威になるとする。故に、これを取り除く軍事行動は、国際法が認める自衛権の範囲内だ、と主張する。
・これに対して、国家と国家の関係は主権の相互尊重が大前提、今回の侵攻はウクライナの主権を一方的に踏みにじるものだ、との非難も多い。加えて、かつてロシアはNATOと「平和のためのパートナーシップ協定」を結び、OSCEにおいても核拡散を防ぐ宣言に署名するなど、国際協調を基軸とした時代があり、それが14年まで続いていた。両国にはそうした路線の下での安全保障の追求が求められ、また関係国もそのための環境づくりが肝要だとする。
・第二は、今回の戦争への導火線となった14年に起きた政変＝マイダン革命の捉え方の問題だ。ロシアは、市民による平和的な反政府デモを利用して、露の弱体化を狙う米が一握りの極右ナショナリストに資金や武器を供給して政権打倒を図った＝クーデターだったと非難する。また、革命後のウクライナ政権は、極右勢力がリードし、東部の独立分離を訴える露語話者の運動に政府軍を派遣し、激しい弾圧を加え人権侵害事件が多発させてと告発。
・一方、14年2月までのウクライナでは親露派ヤヌコビッチが政権を担い、前年EU連携協定の実施を先延ばしして民衆の怒りを買ったことが政変の端緒となった。また、同政権は政府の重要ポジションの人事で、次第に他派を排除し自派で固めたほか、公金の私的流用の嫌疑も絶えず、こうした腐敗に民衆の怒りも加わって大きくなった革命だとする。また、露語話者への人権問題は、双方の過激な民族主義者が蛮行を働いている結果と反論している。

・この二つの段階でのファクトチェックは、第一の問題が解釈や見解の違いを伴うのに対して、第二の方は映像や録音などの物証がたくさん提示され、簡単には判定できないものとなった。しかし、後者も細かに検証をすると、互いの意図的なプロパガンダが見え隠れしていることが判る。
・第三に、昨年2月末から始まった露軍のウクライナ全面侵攻後では、ブチャを始め戦争犯罪を問わなければならない悲惨な事件が次々と発生し、そのたびに多方面から言論戦が飛び交った。この段階では当事国の見解に加え、国連や各国の政府見解やメディア情報の外SNSによる「現地情報」や「個人的見解」の発信も重なって複雑化し、ファクトチェックは一層困難になった。ちなみに個人としていくつかの写真や映画についてささやかながらもチェックを試みると、時間と場所が説明文とずれることが判明し、情報によってはヤラセや盗用画像を含むとの告発メールも見つかった。
・さらに情報の発信元の確かさをチェックすると、戦争状態である国やそれを取り巻く人々が、ファクトよりも相手に勝つこと・自派を有利にすることを最優先する心理から情報を操作している懸念が垣間見えた。戦争に関する情報は、最終的には、主観的で感情に訴える情報を排し、冷静かつ客観的な情報を多面的に集め、それを解析し見分ける読解力が問われて来る。危機の時代と言われる今、情報管理の面でも難しい課題に直面していると考えられる。

＜意見交流＞

★基本的にマスコミの報道を見ていると、その真偽の判定は非常に難しい。自分のスタンスとしては大手マスコミとかそういうとこから流れてくる情報は基本的に信じない。ちょっと言い方変えれば疑問を持って見るという感じです。こういうのは何年かしないとわからない。10年、30年後にわかるということが多い。ですから、ただ直近としては、誰かのせいと言っても誰が得したか、それを重視してもいいんじゃないかなと思います。報道の中身には常に利害関係、損得関係が絡んでいる。

★汚染水を薄めて流せばあまり問題はないと、ある記者が書いた。しかし、僕は彼に薄めて流したって、例えば10分の1に薄めると、そうすると10倍流せばもとのものは同じじゃないか、と言ったのですが、彼は何にも返事をよこさなかった。薄めたら全く無害だと言うけど、僕はまやかしではないかね思っています。

★トリチウム（水素原子の放射性同位体）というのは蓄積しないそうですね。僕はドイツの工場で学者が言っている意見を聞いたのですが、トリチウムは基本的に体から抜ける。だから蓄積しない。そういう性質を持っている。もしトリチウムだけであるなら海洋放出はそれほど人体への危険はないと言っていたのです。

★要するに、トリチュウムの有機化という、細胞の中に取り込まれてしまって、タンパク質とかの一部の化合物になってしまうともう外へ出ていかない。その点については、科学者の意見も割れているわけですよ。

★私はトリチウム（3重水素原子）や炭素C14などの放射性同位元素を研究に使ったことがあります。問題はトリチウム水と自然水とは分離できないことです。体内でのトリチュウム蓄積効果は無視できるが、ごく微量のトリチュウム水が長期間、継続的に体内を通過していくとしたら、「蓄積」と同じくらい問題になると思う。 東電や政府の言っていることは、現時点では「フェイク」ではないかもしれないが、何十年後かに現れる被害の「ファクト」と照らし合わせるとこれは「フェイク」ということになるのではないかと思う

★ハーバード大学のある学部長が面白いことをいっている。「科学はあくまで仮説。今のところは何事も仮説という立場に立って、疑問を持った方がよい。」と。

★トリチウムだけが問題になっているけれども、排水溝の中にはストロンチウムとかセシウムというのは混じっているのです。それはあくまで人間が勝手に決めた基準以下ということで流しているわけですよね。しかし、100%除去できず、わずかであるかもしれけれども、そういう核物質が混じったものを放出していることが問題ではないですか。

★フェイクのニュースの発信というのは、もういくつか明らかになっている。特に戦争ということになると古今東西にあって、日本だと大本営発表という大フェイクがあります。

★今日の話の中で私も納得したのは、誰が得をするか、結局各国とか各企業とか人々の間の利益、そういうことでフェイクが発信されているということを情報の中で自分が感じながら読み取る力が大切かと思いました。
★映画監督の想田さんは、「台本のない映像なんていうのはないんだということがあって、それが嫌で。私は実験映画をやっている」ということを聞きました。

★ロシア・ウクライナ戦争の場合、親ロ派の侵攻を認めようと言うが、侵攻はひどいと言う人もいる。おっしゃった通りなんですけども、私は、フェイクかファクトかで、フェイクの情報が出やすい状況にウクライナにあったと思う。
★僕はウクライナ問題が、何でこのファクトとフェイクの議題になっているのかさっぱりわからない。ウクライナの議論というのはもっと私たちの日本の中でもいっぱいあるし、今日の議題としてはあまり意義を感じないのですけど。
★時間が詰まってきましたので、要は、ある一方の見方ばっかりで見ているとこれがフェイクかどうかということは見分けられない。いろんなことから我々が学んできたことだと思いますよね。それは今提起があったように、日本の事例を挙げて意見交換もした方がいいと思います。
★今日は関東大震災で朝鮮人、中国人、社会主義者、無政府主義者など、6,000人ほどの人たちが「流言秘語」によって虐殺された100年目にあたります。言葉がわからないというだけで朝鮮人の人たちを殺す。それはいとも容易くやってしまう。狂気のごとくやってしまうとこれが人間だなということですね。私はフェイクといのは「流言秘語」と全く同じ根源を持つ言葉であるという風に捉えております。

＜むすび＞　吉田千秋

今日の議論も踏まえて、フェイクかどうかを見分ける観点として、ボクなりに整理してみたいと思います。

1つは、情報の発信元を探すこと。発信元が自分にとって信頼ができるかどうかです。2つ目は、得た情報がオリジナルかどうかを調べること。3つ目は発信された時期を確認するということ。4つ目は、他のメディアが発信する情報との比較です。5つ目は、その情報の目的や利益目標などを吟味してみることです。

それぞれ簡単ではないですが、確実な情報をもとにしてこそ明日の判断、行動ができるのですからぜひ心がけたいことです。このテーマはますます重要度を増してくると思われますので、また取り上げましょう。本日はどうもありがとうございました。

＜例会及び「通信」の感想、意見、便りなどか＞

○＜いろいろ考える機会になった＞

「ファクト」と「フェイク」との見分け方というテーマでの問題提起は面白そうであったが、世界全体のニュースや歴史的事実の多様性を考えると、大きすぎてまとまりに欠けた意見交流になってしまったような気がする。しかし、人はなぜ騙されるのか、政府や国家権力はなぜ嘘をつくのか、大企業はなぜ金儲けばかりに窮きゅうとしているのか、デマや流言飛語に惑わされないためにはどうすればよいのか、いろいろ考える機会になったと思う。　（MS）

○＜様々な情報を見比べてみること＞

情報の量は、その伝達手段の発達に即して広がってきた。ネット各社の各種システムが情報量の増加を促進している。読み取れる多くの情報は“事実”である。

他方で“嘘”の情報もある。それらの中には100%の“嘘”を伝える情報や、“事実”の中に“嘘”入れた情報もある。“嘘”の情報を発信する動機は、①瞬時の名声を得るためや（愉快犯）、②嘘情報を発して金銭を得るなどがあり、内容的には③従前からの自己の主張を補強するための発信や、④自己に利益をもたらす発信であったりする。正しいと信じた読者は嘘情報の側の世論形成者となる。

見かけ上簡単に発信できるネットの活用の中で、これは本当か？と疑う“情報”は発信者が誰なのかを確かめる。その新聞各紙や共同通信、時事通信、NHKなどの報道機関（ネットで見聞可能）がどのように取り上げているか読み比べる必要がある。

（アダム・スミス）

○＜自分で考える癖をつけること＞

ファクトとフェイクの見分け方は、自分で考える癖をつけることが第一であり、情報を鵜呑みにしないことしか無い。よりファクトに近づくためには発信者が誰であるかと、発信者とその情報との利害関係をよく調査することであるとの意見に賛成する。

ハマス、イスラエル問題でバイデンのイスラエル緊急訪問の直前にガザ地区の病院に打ち込まれた情報であるが、ハマス（パレスチナ）、イスラエル両陣営より真逆の情報発信がなされた。どちらがファクトであるかは知らないが、発信者とその情報により受けるベネフィットを考えれば、わざわざこのタイミングでイスラエルが病院への爆撃を行う利はなく、ハマス側によるバイデンの中東諸国への訪問を妨害したのではないかと考えるほうが腹落ちする。

中立的な情報源でない時こそ、その情報によって得られるベネフィットを想像すると事実に近づけることは確率的にも高いものであると思う。

（ryosa）

○＜南京大虐殺報道について＞

フェイクニュースですが、南京大虐殺が気になりま

す。何十万人も殺した、ということが信じられている一方、そんなことは不可能であるということも正しいとも言われています。南京で、日本兵が、子供にお菓子を配った、ということもあるかもしれないそうです。日本兵は、そんな意味のない虐殺をするようなあくどい兵隊でしょうか。日本は、侵略のために戦ったのではなく、アジアを欧米から守ろうとしたと思っているのですが、違うでしょうか。頭が悪かったため、満州国とかおかしな政策も作りましたが。

（E.S）

〇＜本当に重要な情報は隠蔽されているのでは＞

発信される情報がファクトであるかフェイクであるかの見分け方も大事ですが、もうひとつ重要なことがあるのではないかと思いました。それは本当に重要な情報は発信されずに隠蔽されているのではないかという危惧です。例として、ジャニーズ問題で言えば20年前の裁判でジャニー喜多川の性加害は明らかになっているにもかかわらず、BBCが報道するまで日本のメディアはそれに関してなにも発信できませんでした。そんな例は水俣病訴訟など数限りなく存在すると推測されます。したがって、支配層は何を隠したがっているのかという視点を持つことも、これからの世の中を生き抜くためには必要だと感じました。

（たなか）

＜この一冊＞司馬遼太郎著「街道をゆく6　沖縄・先島への道」

朝日文庫、2008年（新装版）

週刊朝日1974年6月21日号～11月5日号に連載された沖縄返還2年後の旅行記である。先島に自衛隊基地が無かった時代である。

沖縄人は縄文時代以来の日本民族の支族であることや近代からの差別の歴史を語っている。沖縄戦で壊滅してもう見ることの出来ない首里の優美な姿を描いていて、美しい都を想像できた。だがこの沖縄戦で約15万人の県民が死んだ。本土には上陸は無くて沖縄が捨て石にされた。当時、陸軍軍人で関東を守る部隊にいた司馬氏はこのことに強い罪悪感を持ち苦しむ姿がここにある。

国、軍隊は、住民を守らないものなのだが、守ってもらえると思っている人たちがいたことを憂いておられる。それが今や自衛隊が同じだ。旅の終わりの与那国島では、アルコール度数70％の泡盛、花酒の話しが出てくる。有名なお酒なので興味深い。でも皆様、くれぐれも飲み方にお気をつけて～。

自給自足の極楽島であった与那国に「国家」がやって来て時とともに重くなった。「与那国島にとって国家というものは、取り憑いて血を吸う化け物のようなものであった」と。2016年与那国島に自衛隊駐屯地が開設された。国は住民を侮り、基地拡張やミサイル配備に突き進んでいる。翻弄されている与那国町の住民にとって、搾取と差別の歴史は続いていると感じる。

50年あまり前の書籍だが、今だから、この本をお勧めしたい。私は、インターネットで購入した中古の文庫本を枕元においている。

（嵯峨崎聖子）

＜この一本＞　ジャファル・パナヒ監督『熊は、いない』 イラン映画、2022年制作

この映画は、世界的に著名なイランの映画監督ジャファル・パナヒの最新作である。彼は女性や子ども、貧困な人々の現実を描き、そこから浮かび上がる社会的障壁や理不尽な慣習・規制に焦点をあて、人権尊重をテーマに映画を撮ってきた。その作品は、ベネチュア、カンヌ等の国際映画祭で様々受賞したが、それが厳格なイスラム宗権国家から、「イラン国家の安全を脅かした罪」で20年間の映画制作禁止と出国禁止を言い渡される。

にもかかわらず、彼は様々な工夫もこらし、2010年以降様々な作品を撮って、取った。この作品は、監督自身も主役として登場し、劇中劇みたいに複雑に描写されるのでちょっと戸惑う。ここではくわしく紹介できないが、話の筋は、イラン社会の抑圧から国外に逃亡しょうとする若い男女の物語と、監督が滞在する旧習の残る村での結婚をめぐる物語で、悲劇の結末で終わる。

村人や撮影助手の人たちの人なつっこさに好感を持ったが、でも緊張感があり、何だか暗い予感がずっと漂う。やはりこの映画も、イラン社会の旧弊と抑圧を告発する作品だった。完成後パナヒ監督はまたもや逮捕され、本国では上映禁止となる。だが、ベネチュア国際映画祭審査員特別賞を受賞する。

理不尽な抑圧に抗する人々の決死の声をぜひ聞き留め、抑圧のない、人権尊重の平和な世界を築く輪につながりたいと思った映画である。

（ Sensyu ）

哲学カフェ185回例会

時刻: 2023年11月9日 07:00 PM～

以下のURLかミーティングID、パスコードで入室できます。
パソコン、スマホ、タブレットのいずれかでどうぞ。

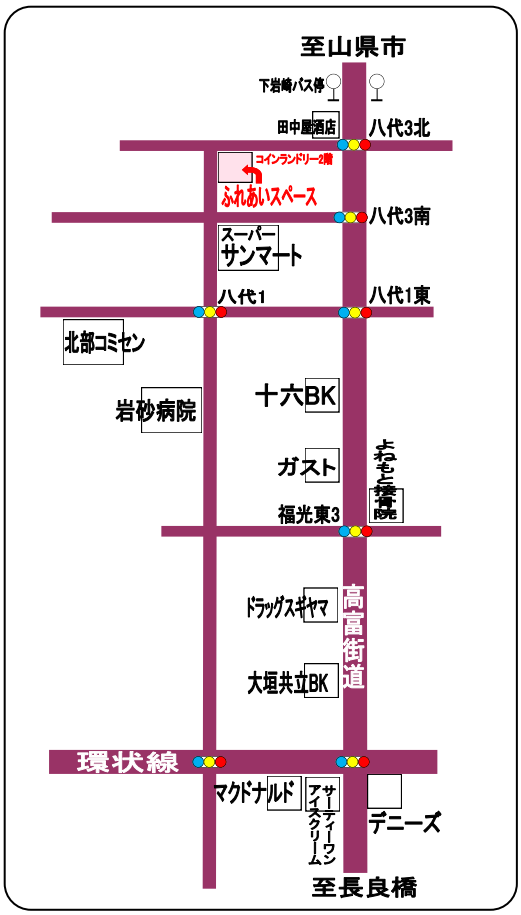
参加 Zoom ミーティング
https://us02web.zoom.us/j/81651511468?pwd=K2oyaDE5aitrMnJ1dGJkWmhzNG5DQT09

ミーティング ID: 816 5151 1468
パスコード: 680034

右のQRコードからも参加できます。

例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です



哲学カフェ　第29期(2023年後半)例会予定　＊毎月第2木曜日、午後7:00～9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第183回 9月14日(木)	「世界125位、なぜ男女平等は進まないのか？」 ＊今年のWEFの発表では日本はまたも下がって、146カ国中の125位。東アジアでは最下位。 ＊特に政治と経済の分野での遅れがひどい。何が問題で、どうすれば良くなるのか考えてみたい。
第184回 10月12日(木)	「ファクトとフェイク、あなたはどう見分けますか？」 ＊発信される情報が偽ものであったのは、古今東西おびただしい。今は情報が大量でかつ巧妙である。 ＊ウクライナ戦況、原発事故汚染水、コロナワクチン等。真偽をどう判別するのか？
第185回 11月9日(木)	「あらためて私たちの家族観を問い直してみよう。」 ＊家族は大切、だがその「家族」像は古いままで、制度上も「世帯」「家族」本位である。 ＊いまこそ多様な家族形態を見つめ、「個人の尊重」を軸にした、新たな家族観を創りださねば･･。
第186回 12月14日(木)	「激動の一年をふりかえって」 ＊異常気象の乱発による生存の危機に加え、ウクライナに続き、中東での新たな戦争危機。 ＊この二重三重の危機に国際社会はこれを乗り切れるのかどうか。私たちの基本的な視点を探る。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。
口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!
http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de　ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや

アラカルト

★柿の季節がやってきた。岐阜では、街を少し出れば赤くなった実をよく目にし、秋本番の到来を知る。今年は夏が異常に暑かったから、実りに影響したのではとの声を多く聞いたが、現時点(10月中旬)では多少実が小ぶりで色づきが遅い印象だ。

★この時期、「柿が赤くなると、医者が青くなる」といった言い伝えを口にする人も多い。少し調べてみた。老化予防・美肌効果・血圧を下げる・腸を整える・動脈硬化を防止・二日酔いを押さえる、等々良いとこずくめ。さらに、葉にもヘタにも効能があり、干せばさらに栄養が凝縮されるというスーパー果物。「人類最古の栄養食」とまで称されている。

★柿の生産は圧倒的にアジアに多く、中国が世界全体の3/4で、西欧では知らない人が多いそうだ。だが、西の方の産地としては、アゼルバイジャンやイスラエルがあり、少量ながらも栽培されている。そこに近いからだろうか、ウクライナ人も知っていた。

★今年の秋は、そのウクライナだけでなく、パレスチナやイスラエルにまで戦火が及び、21世紀は一体どうなっていってしまうのかと不安が募るばかりだ。

★日本では柿は穏やかな秋のシンボルでもある。その心象は、「柿食えば、･･･」の有名な俳句と関連付ける人が多いのではないか。しかし、作者＝正岡子規が1895年の日清戦争に連隊付き記者として従軍した後の歌でもあることは知られていない。

★128年前、「戦争と平和」がどれほど悩ましい問題とされたかは分からないが、昨今の西と東の狭間で燃え盛る戦争は、あまりにも矛盾の大きい世界の現実を強烈に見せつけている。

（大橋健司）